

学内家庭訪問実習が学生単独家庭訪問へ及ぼす効果

細田 裕子・遠山 清香・松尾由貴子・細田せい子

The effect of on-campus home visit training on Public Health Nurse
Students home visit independent

Hiroko HOSODA, Sayaka TOOYAMA, Yukiko MATSUO and Seiko HOSODA

要旨：本研究は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い実施された学内家庭訪問実習が、学生単独家庭訪問の実施にどのように役立ったかを明らかにすることで、次年度の実習前演習内容を検討することを目的とした。令和2年度に公衆衛生看護学実習IおよびIIを履修した学生のうち同意を得られた9名を対象にフォーカス・グループ・インタビューを実施し、質的帰納的方法で分析した。学内実習で家庭訪問に必要な計測・観察技術を習得し、情報収集方法や情報提供などの改善点に気づき、単独家庭訪問に向けて改善することができた。学内実習で家庭訪問の特徴を理解して単独家庭訪問を実践したことで、支援方法や家庭訪問の重要性の理解を深めていた。今後の演習では、生活環境に近い場所で、実際の事例を模した事例を用いた少人数のグループでのロールプレイを実施し、ロールプレイで得られた課題や学びを学生間で共有し課題解決方法を検討する時間を設けることが必要であると考えた。

Key words：公衆衛生看護学 (public health nursing), 学生単独家庭訪問 (home visit independently), 学内家庭訪問 (home visit on campus)

はじめに

保健師の行う家庭訪問は、家族を単位として生活の場で健康問題を解決するために行う支援活動¹⁾であり、公衆衛生看護技術の中心的なもの²⁾である。これらの家庭訪問は、母子保健法、高齢者の医療の確保に関する法律、感染症予防法など様々な法律で規定されており、保健師活動において重要な援助方法の1つに位置づけられていると言えることができる。実際に活動している保健師の99%が「訪問で得られる情報は重要である」など家庭訪問を対象者および地域の実態把握のために有効な手段であり、保健師にとって重要な業務であると認識している³⁾。一方、新人保健師の多くは、家庭訪問を苦手な活動であると感

じている⁴⁾。稲毛⁵⁾は、家庭訪問は通常保健師が1人で実施するため、訪問先で困難な状況に陥ったときに即座に同僚のサポートが受けられないことや、自身が行った対応が適切だったのかどうか、第三者の客観的評価が得にくい側面があると述べている。また、保健師の現任教育は、病院の現任教育に比べると先輩保健師がマンツーマンで指導にあたる期間は概して短く、新人保健師は不安の中で業務をこなしているとし、保健師の分散配置による保健師間での情報や技術共有の困難さについても述べている。学生のうちから家庭訪問を経験し、家庭訪問に対する苦手意識を感じることがないように指導を行っていく意義は大きい。このような状況の中、2011(平成23)年の保健師養成所指定規則改正で公衆衛

生看護学実習単位が5単位に増えたことを機に保健師教育を選択制とする大学が増え、実習で家庭訪問が経験できるよう配慮されている。しかし、現在も多くの大学で行われている公衆衛生看護学実習の家庭訪問は、保健師に同行し見学⁶⁻⁷⁾するものや、学生2～3名を1組にして家庭訪問を実施⁸⁻¹⁰⁾するものが多く、現場の保健師と同様に、学生が単独家庭訪問を実施する大学は少ない。また、訪問回数は1人当たり2～3回¹¹⁻¹²⁾、訪問対象者は高齢者と新生児・乳児が多く¹³⁻¹⁴⁾全てのライフステージを対象に家庭訪問を行うことはできていない状況である。

本学専攻科地域看護学専攻では、公衆衛生看護学実習Ⅰ（前期）において乳児のいる家庭に1回、公衆衛生看護学実習Ⅱ（後期）において乳児のいる家庭（原則、公衆衛生看護学実習Ⅰと同じ対象者）・成人期・高齢期を対象に1回ずつ、合計4回の学生単独訪問を実施してきた。更に、1回以上、現場の保健師等の家庭訪問に同行しており、他大学等と比較して家庭訪問経験回数が多いこと、学生単独訪問を数多く実施していることが特徴である。このような実習内容にしているのは、学生の時に単独訪問を経験することで、保健師として就職した際にも家庭訪問を1人でこなせる基礎を養うためである。学生単独訪問対象者は、乳児家庭全戸訪問の対象となる乳児、特定保健指導対象者となる成人、介護予防対象者となる高齢者の3事例とすることで、市町村保健師として活動する際に家庭訪問対象となることが多い対象への家庭訪問を全員が経験することができるようにしてきた。しかし、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、公衆衛生看護学実習Ⅰの乳児家庭訪問が実施できない状況となった。その代替として教員が母親役をして学生1人ひとりが実際と同様の家庭訪問を行い、母親役以外の教員がその様子を観察し、終了後に各教員が気づいたことをアドバイス

する学内実習を実施した。学内実習終了直後には、学生から「例年通りなら、学内でこんな経験をしないで家庭訪問に行ったと思うと、怖い」「実際に家庭訪問を行う前に、学内でやって良かった」といった言葉が聞かれた。また、教員も学生の援助技術や態度などを見ることができ、学生1人で対象者の自宅に訪問し援助を実施する家庭訪問実習に向けた学内演習の内容を検討していく必要があると考えた。

研究目的

本研究は、令和2年度の公衆衛生看護学実習Ⅰの学内家庭訪問実習が、公衆衛生看護学実習Ⅱの学生単独家庭訪問実施にどのように役立ったか、どのようなことが学びが深まることにつながったと学生が感じたかを明らかにし、次年度の実習に向けた演習内容を検討することを目的とした。

家庭訪問に関する授業、実習内容（例年および令和2年度）（資料1）

例年の家庭訪問に関する授業・演習・実習は、次に述べるとおりである。4～5月に、家族支援論と母子公衆衛生看護活動論の授業で家庭訪問について学ぶ。家族支援論では家庭訪問の意味や対象者の捉え方等を理解し、家庭訪問のプロセスを学ぶ。その後、母子公衆衛生看護活動論で、乳児のいる家庭への家庭訪問計画を各自で立案した後、その内容や注意点などを確認する。5月末までに各実習施設から1人1事例を紹介されるので、担当教員から指導を受けながら、各自で家庭訪問計画を立案する。6月には学内実習として、家庭訪問において信頼関係を築くことや対象へ適切な支援をするために必要なことなどをグループワークで話し合い、計測方法等を確認・練習する。その後、代表学生による家庭訪問のロールプレイを行い、より良い家庭訪問を行うための話し合いを行う。6～7月には実習施設に向き、家庭訪問計画について指導者から指導

を受け、家庭訪問を実施する。その後、家庭訪問記録を作成し、教員から指導を受け、完成したものを指導者に提出する。夏休み課題として、成人および高齢者の事例を基に家庭訪問計画を立案し、9月の成人・高齢者公衆衛生看護活動論で計画の内容や実施方法などを確認する。9月末～10月の公衆衛生看護学実習Ⅱでは、母子・成人・高齢者の3事例を指導者より紹介していただき、家庭訪問を実施する。

令和2年度は、前期に学内で学生単独の乳児家庭訪問実習を実施した。内容は次の通りである。過去の学生が各実習施設で家庭訪問を行った事例を基に、学生が学びやすい事例を1人ひとりに作成し提示した。その事例につ

いて、例年同様、担当教員の個別指導を受けながら各自で家庭訪問計画を立案した。6月の実習では、家庭訪問において信頼関係を築くことや対象へ適切な支援をするために必要なことなどをグループワークで話し合うこと、代表学生の家庭訪問ロールプレイとその後の話し合いを行わない代わりに、学生2～3名で家庭訪問の最初から最後までどのように対象と関わるかを話し合いながら行い、教員が個別や全体に信頼関係の築き方や支援の準備・内容等について指導を行った。単独家庭訪問の実施については、より家庭訪問の雰囲気になづくよう和風一軒家の特別教室で1人1時間程度、母親役の教員に対して実際と同様に実施した。

資料1 家庭訪問に関する授業、実習内容 (例年および令和2年度)

(例年の内容)		(令和2年の内容)	
時期	内容	時期	内容
4 ～ 5 月	<ul style="list-style-type: none"> ●授業 ・家庭訪問展開方法等の理解 (家族支援論) ・乳児家庭への家庭訪問計画演習 (母子公衆衛生看護活動論) ▼実習 ・家庭訪問事例配布 	4 ～ 5 月	<ul style="list-style-type: none"> ●授業 ・家庭訪問展開方法等の理解 (家族支援論) ・乳児家庭への家庭訪問計画演習 (母子公衆衛生看護活動論) ▼実習 ・家庭訪問事例配布
6 月	<ul style="list-style-type: none"> ▼学内実習 ・家庭訪問実施の際の必要事項確認 (信頼関係を築くうえで必要なこと、対象のニーズに合った適切な支援をするために必要なこと、スムーズに家庭訪問を行うために必要なこと) 【地域・老人実習室】 ・計測方法等確認 (計測方法、おむつ交換、股関節脱臼検査方法) 【地域・老人実習室】 ・代表学生による家庭訪問のロールプレイ ・家庭訪問計画立案 (教員・指導者指導) 	6 月	<ul style="list-style-type: none"> ▼学内実習 ・学生2～3名で家庭訪問の流れ、計測方法等の確認、(教員指導) 【短大会館】 ・計測方法等確認 (計測方法、おむつ交換、股関節脱臼検査方法) 【地域講義室および短大会館】 ・家庭訪問計画立案 (教員・指導者指導)
6 ～ 7 月	<ul style="list-style-type: none"> ▼公衆衛生看護学実習Ⅰ ・家庭訪問実施 【対象者自宅】 ・家庭訪問記録作成 (教員指導) ・家庭訪問の振り返り 	6 ～ 7 月	<ul style="list-style-type: none"> ▼公衆衛生看護学実習Ⅰ (学内実習) ・教員が母親役になり、家庭訪問実施 【短大会館】 ・家庭訪問記録作成 (教員指導) ・家庭訪問の振り返り
夏 休 み	<ul style="list-style-type: none"> □課題 ・成人および高齢者を対象とした家庭訪問計画立案 	夏 休 み	<ul style="list-style-type: none"> □課題 ・成人および高齢者を対象とした家庭訪問計画立案
9 月	<ul style="list-style-type: none"> ●授業 ・成人・高齢者を対象とした家庭訪問計画の考え方、内容確認 (成人・高齢者公衆衛生看護活動論) 	9 月	<ul style="list-style-type: none"> ●授業 ・成人・高齢者を対象とした家庭訪問計画の考え方、内容確認 (成人・高齢者公衆衛生看護活動論)

* 網掛け部分は、令和2年度に実施内容が異なったところ

* 【 】内は、令和2年度に実習場所が異なったところ

研究方法

1. 調査対象

令和2年度飯田女子短期大学専攻科地域看護学専攻に在籍し、公衆衛生看護学実習Ⅰおよび公衆衛生看護学実習Ⅱ（市町村実習）を履修した学生のうち同意を得られた9名。

2. 調査期間

令和3年1月21日～2月1日

3. 調査・分析方法

対象者9名を4名と5名の2つのグループに分け、フォーカス・グループ・インタビュー（以下、FGI）を行った。インタビュー内容は、前期の学内家庭訪問実習で後期実習での学生単独家庭訪問実施に役立ったことや学びを深めることにつながったこととした。以下の手順に沿って質的帰納的方法で分析を行った。

- ①録音した内容を逐語録に起こした。その際、対象学生は記号化した。
- ②逐語録を熟読し、前期の学内家庭訪問実習で後期実習での学生単独家庭訪問実施に役立ったことや学びにつながったことについて語られている部分を抽出した。
- ③抽出した部分を類似と相違・差異に留意しながら、サブカテゴリを生成し、さらにサブカテゴリを意味・内容ごとにまとめてカテゴリを生成した。

4. 倫理的配慮

飯田女子短期大学研究倫理委員会の審査を経て、承認（令2-3）を受けた後、調査を開始した。研究の目的・方法・倫理的配慮をインタビュー調査協力依頼文書に記載し、配布時に口頭で説明し研究協力を依頼した。その際、研究参加の有無や調査結果が学業成績や単位取得に影響を与えないことを十分説明するとともに、研究説明およびインタビュー実施時期を、公衆衛生看護学実習Ⅱの評価を学

生に返却した後にした。調査協力の了承を得た学生には、再度研究目的・方法・倫理的配慮を文書と口頭で説明し、その後、同意書への署名をもって同意を得た。

倫理的配慮は以下のとおり。

- ①調査への協力は自由意思に基づき、調査協力を断ったり中断したりしても単位取得や授業評価などいかなる不利益も被らないようにすること。
- ②回答者の匿名性を保持すること。
- ③結果は本研究以外の目的で使用しないこと。
- ④結果は飯田女子短期大学集談会等で発表すること。その際、個人が特定される情報を公開することはないこと。
- ⑤研究に関する疑問・質問にはいつでも回答すること。
- ⑥協力者の許可を得て録音し、録音した内容は研究終了後消去すること。
- ⑦飯田女子短期大学研究倫理委員会の承認を得て行うこと。

結 果

学生の語りから、学内演習および学内実習での学びや課題、学内実習が役立った単独家庭訪問の経験、単独家庭訪問からの学びや課題について整理した。

以下、カテゴリを【】、サブカテゴリを〈〉、語りを「」で示す。

1. 学内演習および学内実習での学びや課題（表1）

前期の公衆衛生看護学実習Ⅰにおける学内演習および学内実習で得られた学びや課題についての語りを分析したところ、5カテゴリ、17サブカテゴリが抽出された。抽出されたカテゴリは、【計測技術の習得】【計測以外の技術の習得】【家庭訪問の理解】【自己課題の気づき】【家庭訪問実習に対する思い】であった。

1) 【計測技術の習得】

〈正確な計測技術の習得〉〈家庭環境に合った計測方法の習得〉〈対象者に配慮した計測方法の理解〉で構成された。

学内演習で計測方法の確認・練習したことで計測技術不足に気づき、更に練習や教員に質問することで〈正確な計測技術の習得〉ができていた。また、学内実習を畳の部屋で行ったことで、訪問先の環境に合わせて平らな場所で量ることを意識できたことから〈家庭環境に合った計測方法の習得〉ができていた。家庭訪問では、訪問した家庭環境に応じて体重計などのセッティングをするが、その際に「片付けがしやすいとか手際が良いとか」学生主体で動線を考えていたことに気づき、子供が不快にならないような動線を考えて物品を配置する〈対象者に配慮した計測方法の理解〉ができていた。

2) 【計測以外の技術の習得】

〈発達確認方法の習得〉〈股関節脱臼の確認方法の習得〉〈生活の聞き取り方の理解〉〈家庭訪問に適したチェックリストの使い方〉で構成された。

乳児家庭訪問では、発達や股関節脱臼の確認、授乳や睡眠など生活状況の確認も行う。これらも学内演習および学内実習で経験したことで、技術の習得につながっていた。また、各自で作成した情報収集のためのチェックリストを用いて学内実習を行ったことで、看護学校で経験してきたこととは違う〈家庭訪問に適したチェックリストの使い方〉を理解していた。

3) 【家庭訪問の理解】

〈家庭訪問の具体的イメージの獲得〉〈家庭訪問の特徴の理解〉〈訪問時のマナーの理解〉で構成された。

家庭訪問については、実習までに授業で学んでいる。しかし、学内実習で家庭訪問を行ったことで、限られた時間の中で計測や情

報収集などをどのように実施するのかといった〈家庭訪問の具体的イメージの獲得〉ができたと感じていた。また、「その人が生活していく力を高められるように関わる」等の、保健師が行う〈家庭訪問の特徴の理解〉ができていた。家庭訪問時のマナーについての指導を受けて、〈訪問時のマナーの理解〉ができて良かったと感じていた。

4) 【自己課題の気づき】

〈上手くできなかった経験〉〈クラスメイト同士で失敗と改善点の共有〉〈情報提供のための準備不足〉〈時間管理の不足〉で構成された。

学内実習では、焦りから〈上手くできなかった経験〉をし、〈情報提供のための準備不足〉〈時間管理の不足〉といった具体的な改善点に気づいていた。また、自分自身の学内実習の経験だけでなく〈クラスメイト同士で失敗と改善点を共有〉することで、クラスメイトの経験も自身の学びにしていた。

5) 【家庭訪問実習に対する思い】

〈単独家庭訪問を行うことへの不安〉〈学内実習だから得られた学び〉〈学内実習があって良かった〉で構成された。

本専攻科では、前期から学生単独家庭訪問を実施することを入学前から伝えており、学生はその実習内容を承知して入学している。しかし、「実際に自分たちがやるかもしれないとなった時にやっぱり怖い」と感じ、「その人にとって大事な家庭訪問でできなかったらどうしよう」と〈単独家庭訪問を行うことへの不安〉を感じていた。学内実習で、教員が家庭訪問の様子を見て指導を受けたことで、家庭訪問計画の指導や単独家庭訪問の振り返りだけでは気づけなかった〈学内実習だから得られた学び〉が多く、住民を対象とした単独家庭訪問の前に〈学内実習があって良かった〉と感じていた。

表1 学内演習および学内実習での学びや課題

カテゴリ	サブカテゴリ	生データ	対象学生
計測技術の習得	正確な計測技術の習得	(前期の演習で) 最初に先生から基本的な手技を教えてもらって、そのあとに自分たちで練習した。まず聞くと、こういう風にやればいいのかってことは分かるけれど、実際に自分たちでやってみると、まず赤ちゃんの抱き方ってこれで合ってたよねから始めて、身長を測るときもどこを押さえてどこでってというのが分かればいいのかっていう所とか、細かいところが分からないって思って、それを自分たちで先生に聞いたり、(学生同士) お互いに持ち合って解決していった。	F1
		学生同士での練習の時間もあり、その中でお互いの良いところだったり悪いところだったりも見えてきて、学生同士からの気づきからも得られるところがすごく大きかった。そういったところが、実際、技術の習得につながったのかなと思ったので、その時間もすごく良かったと思う。	D6
		(学内実習で) 事前に(家庭訪問を)したのがすごく助かった。学内実習の時に測定の仕事は大体わかっていたが、どこかぼやぼやしていたので、改めて(学内実習で)ちゃんと確かめてやれたのでよかったと思う。	H1
		看護学生の時から、身長を測るときにオムツは外さなくていいってずっと思っていて、それが自分の中の当たり前知識だった。それを(学内実習で)客観的に見てもらったことで、それは違うんだということに気づけたので、技術や知識を改めて学べたので良かったと思った。	C2
計測技術の習得	家庭環境に合った計測方法の習得	ここ(教室での計測演習)はフラットな場所だったし、体重測定の際はフラットで柔らかくないところで測るのが一番正確な値ってのは分かったうえで計測をしていた。しかし、(学内実習で)畳の上で量った時には、畳の上で量るのがいいか悪いかで考えられなかった。生活の場に則した計測の方法を考え切れていないことを前期の学内実習で指摘されて気づけた。(後期実習の家庭訪問時には畳の部屋で計測する場面があり、その時に固い床でフラットなところで(計測する)ということを意識してできて良かった。)	G1
		一般的な計測方法は勉強してきたが、訪問した家の環境に即した(方法)、子どもが不快に思わないような手順や流れ、男の子だったらオムツを外した時におしっこが出てしまうとかということを全然知らなかったので、前期実習の時に先生からアドバイスをもらうことで、気を付けるポイントが学べた。	I1
計測以外の技術の習得	対象者に配慮した計測方法の理解	産婦人科病棟に勤務していた時、新生児の体重や身長を測る時には、決められた計測場で、自分の動線もルーティン化していて何も意識していなかった。(学内実習で)自分でセッティングして赤ちゃんの計測をするという時に、自分主体で動線を確保しようとしており、こうしたら片付けがしやすいとか手順が良いとか考えていたけれど、実際にそのようにやってみると、行き来したりすることでお子さんがすごく不快に思いやすいとか、頭の上をごたごたしちゃうって言うところ気づけて。すごく自分主体だったところがお子さん主体の計測ということを学ぶことができたと思う。	G2
		身体計測の時の動線も、自分では良いと思っていても、やっぱり先生から見るともう少し直せるところがあるよって、客観的に見てもらったところでの気づきは得られた。	D3
		学内実習で乳児計測をしたときに、物品の配置と乳児に負担なく効率よく測定できる方法を、自分で計画を立てて実践できて、実践を評価したことで、このやり方は正しかったのかってことを自分の中で再確認できた。	F9
計測以外の技術の習得	発達確認方法の習得	引き起こし反射とか腹ばいの練習とか、赤ちゃんを動かして発達を見るのは、教科書で見るだけだと、手のどこを掴んで持ち上げるのかとか、腹ばいもどいうところを動かして、徐々に上半身を動いていくって言うことだったと思うけれど、そういうところも実際にやってみることで分かったことがあったので、教科書だけだと学生同士でも悩んでしまうことがあって、先生に確かめてもらって(良かった)。	D7
		後期実習では(引き起こしや腹ばい練習)はやらなかったけれど、(実習で)やっておかないと実際の現場にでるまでにやる機会がなかったのかなと思うと、前期の(学内)実習でその練習ができたのはよかったと思う。	D8
	股関節脱臼の確認方法の習得	学内実習で股関節脱臼の確認をした。後期実習での訪問は6か月児にしたけれど、実際に生身の赤ちゃんでさせていただくのは不安だったので、学内で練習できてよかった。	E3
	生活の聞き取り方の理解	学内実習の時に、1日の生活を教えてもらうために紙を渡して記入してもらってという風にしたっていう失敗があり、一日の生活、赤ちゃんだけでなくお父さん・お母さん・きょうだいみんなの生活リズムを聞くっていうのはすごい難しいなと感じていた。学内実習後に、先生から一日の生活の聞き方の例を教えてもらえて、すごく良かったなって思う。	F8

	家庭訪問に適したチェックリストの使い方	看護学校の実習では、絶対に患者さんにメモ帳を見せるな、目の前で記録をとるなど教わってきたので、家庭訪問でも絶対にメモやバインダーを出しちゃいけないと思っていた。だから、体重測定をしたらこっちに来て書いたりしていたが、そこも(チェックリストを対象者の前に出していい)と言われて初めていいんだって気づいた。保健師さんの家庭訪問って私が今までやってきた実習って違うなと思って、目的によってやり方も変わってくるし、自分も柔軟に考えようと思って、作ったチェックリストを対象者の前に持って行ったり見せたりしてもいいんだって(ことに気づけた)。	H3
家庭訪問の理解	家庭訪問の具体的なイメージの獲得	(学内実習ができて良かったなど)一番思ったのは、家庭訪問というものをイメージすることができたことだと思う。イメージっていうのは、家庭訪問ですること、計測や母子手帳の確認とかの流れをイメージすることができたり、対象者によって違うけれど、これだけは必ず聞かなきゃいけないことや聞き方だとか、限られた時間の中の聞き方の順序だったりとかをイメージすることができたと思う。	A2
		学内実習で、保健師が行う家庭訪問のイメージができた。	B1
	(学内実習で)イメージがついたっていうのがあったのと、保健師がする家庭訪問っていうのがいまいち分かっていなくて、演習した時には何か訪問して、測定して、話して終わるのかなっていう、自分の中の思い込みがあった。	E1	
	(家庭訪問の)流れとか、母子手帳でどこを確認してとか何をしてから何をするとか、っていうのは教科書や資料に書いてはあるけれど、正直それは全然覚えられなくて、実際にやってみたら、やっぱり頭にもはいるし、覚えやすいなと思って、体重計でエラーが出るとっていうのはやってみないと分からないし、そういうのは実践と本でみるだけとはだいぶ違うなと思った。	A5	
	DVDを見ても気づかなかった(家庭訪問を実際に)やってみることで違うんだって実際に知れた。本当にビデオだけだったら、ついてるもの(そういうもの?)だと思ってさっと見てたと思うので、(学内実習で)実際に感じられたっていうことはすごく良かったと思う。	C3	
家庭訪問の特徴の理解	家庭訪問の特徴の理解	(看護師の)新人教育で本当に大丈夫かという感じで教育をされてきたことと、患者さんもこのまま本当に退院しても大丈夫なのかというかわりをしていたので、家庭訪問計画を立てる段階での自分の中の考えの癖とかで、この人は本当に大丈夫かという視点で関わっているところがあって、家庭訪問を実際にやってみて住民の方と関わる時には、その人が生活していく力を高められるように保健師は関わらなくていいことをすごく学んで、保健師の活動のあり方とか、そういう考え方を学ぶことができたと思った。	E2
	(学内実習で)家庭訪問は赤ちゃんだけでなく、そのお父さんやお母さんも対象者として見なければいけないから、家族も血圧や環境を見ることも必要と学んだので、良かったなと思う。	H8	
訪問時のマナーの理解	訪問時のマナーの理解	人の家へ上がるということが、友達の家とかはあっても、行政の専門職として、靴の揃え方とか、畳の縁は踏んじゃいけないとか、座布団には座らずに一旦(座布団の横に)座ってから座るとか、本当に細かいところだけれど、そういうのは実践をしてみてイメージできたし学べたことだった。	B3
	(訪問時の)マナーも実際に見てもらえたので、やっぱり大事なものでよかったなと思う。	D4	
	(家庭訪問にあたって)知らなかった礼儀を知ることができた。礼儀とかは、いきなり家庭に行かせてもらっていたら、相手の方からは絶対に注意されないことで(それを知れたのはよかった)。	C1	
自己課題の気づき	上手くできなかった経験	学内実習の時に、実際に(部屋に)おもちゃが置いてあったり、赤ちゃんが寝ていたという環境の中で、(基本的な計測の手法や抱き方など)どういう風にやってたっけというところから、ちょっと焦ってしまっとうまくできなかったりした。	F2
	(学内実習で)落ち着きがないという指摘もされて、確かにそうだったなって思った。	H5	
	(学内実習で)実際にやった時に色々すごい失敗をして、エプロンを付けなかったり、すごい汗をかいて赤ちゃんに汗をたらしちゃったりした。あれが本番だったら私はもうどうしようと思ったりもした。	H2	
情報提供のための準備不足	母親へ情報提供する資源も準備していかないといけないと思うけれど、そこが不足しているなって思ったので、情報提供の準備も後期に活かそうっていう思いになって、気づきもできたからよかった。	D2	

自己課題の気づき	時間管理の不足	学内実習では計画を立てて自分なりに優先順位も把握していたつもりだったが、結構やっぱり時間が超過してしまったので、時間配分を次の(後期の)実習で活かそうという気づきになったので、(学内実習で)やってみて良かったな一っと思う。	D1
	クラスメイト同士で失敗と改善点の共有	(学内実習で)クラスメイトがうまくいったことやできなかったところも情報共有することで、自分の学びになりいかすことができるから、すごく良かったなという風に思う。	F6
		(学内実習で)失敗しちゃったとか、こういうことを(先生から)言われたからこういうこと気をつけようねっというのを、個人的ではあるがみんなで話していた。	F7
家庭訪問実習に対する思い	単独家庭訪問を行うことへの不安	前期から実習でご家庭に行って家庭訪問ができるっていうこの学校の強みを求めてきた(入学した)が、実際に自分たちがやるかもしれないとなった時にやっぱり怖くて(笑)高齢者の方でもご家族の方でも、その人にとって大事な家庭訪問でできなかったらどうしようとか色々考えていた。	C4
	学内実習だから得られた学び	記録(家庭訪問計画)を事前に見てもらえけれど、文章だけでは見てもらえないところを、目で見てもらったことを教えてもらえたので、そういうことを客観的に見てもらえたことがすごい学びになったな一っと思う。やっぱり記録だけじゃ得られない気づきってあるな一っと思った。	D5
		学内実習で自分の技術について先生たちがアドバイスしてくれたことで、自分では分からない視点だったり、自分が良いと思ってても相手にとったら捉え方が違うっていうのを学んだ。もしこれが、学内実習でデモンストレーションせずに家庭訪問をしていたら、あんまり気づけなかったことなのかなと思って、自分で振り返っても気づけなかったこともあったと思う。前期の学内実習があったことによって気づけた部分がすごい多くあったので、そこが学びにつながってよかったな一っと思う。	I8
	学内実習があって良かった	前期の学内実習ができて良かったな一っと思う。	A1
実際に(家庭訪問に)行く前に(学内実習で)練習ができてよかったな一っと思う。		B4	
前期実習でいろいろな失敗をしたり、看護学校で身につけていたやり方でない柔軟な方法に気づけたので、前期実習が本番(実際の住民を対象にした家庭訪問)じゃなくて良かったな一っと感じた。		H4	

*生データは、逐語録から取り出した語りの文章を常体に統一し、主語や説明が足りないところは括弧内に補足した。

2. 学内実習が役立った単独家庭訪問の経験 (表2)

学内実習が役立った単独家庭訪問の経験に関する語りを抽出し分析したところ、4カテゴリ、13サブカテゴリが抽出された。抽出されたカテゴリは、【乳幼児の計測】【情報収集】【情報提供】【学内実習から改善】であった。

1) 【乳幼児の計測】

〈家庭環境に合わせた正確な計測〉〈家庭訪問以外での乳幼児の計測〉で構成された。

学内実習では、畳の部屋で正確に計測することを経験したが、単独家庭訪問では畳の部屋やカーベットの部屋など様々な環境で計測していた。学内実習と異なる環境であっても、正確な計測をするためにどのような方法で行ったら良いかをその場で考え〈家庭環境に合わせた正確な計測〉ができていた。市町村実習では、乳児家庭訪問の他に乳幼児健診な

どで乳幼児の計測を経験することがある。学内実習で実施した対象と異なる月齢の乳幼児の計測も、学内で計測方法を確認していたことで〈家庭訪問以外での乳幼児の計測〉が実施できていた。

2) 【情報収集】

〈情報収集項目の優先順位の明確化〉〈適切な情報収集方法を考え実践〉〈対象者の話を聴く姿勢〉で構成された。

家庭訪問計画立案時に、健診結果などの事前情報から情報収集項目をあげている。事前情報を読み取ることで「家庭訪問に行ったときに、何は絶対に見落としではいけないか確認した方がいいかということ、自分の中でしっかり確認」することができ、多くの情報収集項目の中で必ず確認すべきことは何かを考えることで〈情報収集項目の優先順位の明確化〉をしていた。情報収集をする際には、

「相手が答えやすいような聞き方や、ただの質問にならないようなコミュニケーションの取り方」を工夫したり「どんなふうに聞いたら答えやすいかな」ということを、計画の段階でじっくり考える」ことで、〈適切な情報収集方法を考え実践〉することができていた。また、〈対象者の話を聴く姿勢〉で臨んだことで、学生が知りたいことを聴くだけでなく、対象者が「今悩んでいることや知りたいことをしっかり聞く」ことができていた。

3) 【情報提供】

〈十分な準備をした情報提供〉〈対象者が理解しやすい説明〉で構成された。

〈十分な準備をした情報提供〉では、予防接種に関する母子健康手帳の内容を確認したり、実習市町村で提供している社会資源について対象者に周知している書類を見たりすることで、対象者が得ている情報を知り、それらの説明ができるように準備していた。また、実習市町村内の支援施設を見学することで、「雰囲気やスタッフさんの様子、人数は多いのか少ないのかということを見せていただいて」具体的な情報提供ができるよう準備していた。

家庭訪問では発達や健診結果について説明するが、学内実習でうまく説明できなかった

内容を自己学習していたことや、授業で説明した経験から、家庭訪問で〈対象者が理解しやすい説明〉を行うことができていた。

4) 【学内実習から改善】

〈具体的な注意点を意識〉〈改善したチェックリストの活用〉〈マナーを守った訪問〉〈時間管理〉〈訪問予約時に必要事項を伝える〉〈適度な緊張感〉で構成された。

学生は、学内実習で気づいた様々な自己課題を改善して単独家庭訪問を行っていた。各自が学内実習で指摘された〈具体的な注意点を意識〉して単独家庭訪問を実施したり、教員からの助言や実習施設で利用しているものを参考に〈改善したチェックリストの活用〉をしたりしていた。家庭訪問時の時間管理が課題の一つにあがっていたが、「学内実習で時間配分が分かった」ため、訪問時の〈時間管理〉ができていた。また、学内実習では電話で訪問予約をとることも経験したため、単独家庭訪問の〈訪問予約時に必要なことを伝える〉ことができていた。学内実習では過度に緊張していたが、単独家庭訪問では〈適度な緊張感〉で「冷静に自分のすべきことを考えることができた」と感じていた学生が多かった。

表2 学内実習が役立った単独家庭訪問の経験

カテゴリ	サブカテゴリ	生データ	対象学生
乳幼児の計測	家庭環境に合わせた正確な計測	(学内実習で計測場所について指摘されていたので) 後期実習の家庭訪問時には畳の部屋で計測する場面があり、その時に固い床でフラットなところで(計測する)ということ意識してできて良かった。	G1-2
		訪問する家の状況や家族の状況が全然違ったけれど、学内実習の時の畳の部屋で体重を測るということを活用して、カーペットのお部屋で計測をする時に、カーペットをめくってフローリングでやるっていうことは、自分の中では応用ができたので、状況が違って学内実習で実際にやったことが活かせるかなって感じた。	B7
		(学内実習で) 計測の時もセッティングの仕方や畳の上で測定をしないようにということ(教員から) 指摘されたからこそ(後期実習で家庭訪問をした際に) 意識づけられていたので、慌てずに後期の一人で行った家庭訪問でもこなすことができたと思う。臨機応変に対応することができたかなって思う。	G3
		(学内実習で) 家庭での血圧測定の方法を指摘された。実際の(後期実習)訪問でもお母さんたちの血圧測ることになったので、(前期に) やって良かったなって思う。	H9

乳幼児の計測	家庭環境に合わせた正確な計測	学内実習では、同級生同士で情報交換したり、手技を見たりして、自分たちなりの工夫も最大限作り上げて挑んだ。しかし、良かれと思ってしている手技が悪い面に働きかけているっていうところも、同級生同士だと現場に出ているから善し悪しが判断できなかったところを、先生方から見ると、そういうのはさすがに生活の場ではちょっとっていうところとか、手技の一つ一つで工夫点とか、誤差に影響を与えていたとか、そういうことを視野を広くもって、気づかせてもらえたところがよくなったって思っている。自分たちだけじゃ気づけないことを気づかせてもらった。だから現場に出たときにそこを意識して正確な値で測定することができたろうし、自分たちもちょっと落ち着いて、いろんな相手を知らうとして相手から話を素直に聞くことができたのかなと思う。	G7-1
		学内実習や演習の時から、お母さんに服を脱がせてもらったり、お母さんに体重計に(乳児を)のせてもらったりとか、お母さんが少しでも児に関われるようにすることで、お母さんが子どもにどう関わっているのかっていうのを確認することができるっていうことと、お母さんの手技も確認できるっていう、お母さんにやってもらうことの利点を学ぶことができたので、後期の実習でもお母さんができることはやってもらうっていう主体性を促すことにつながったかなと思うので、前期でそれを知れたのがすごい良かったなって思う。	D9
	家庭訪問以外での乳幼児の計測	(後期実習では) 家庭訪問だけでなく乳幼児健診などでも測定させてもらうことが結構あったので、学内で測定方法を見直したことが準備になったので助かったなと思った。	H7
情報収集	情報収集項目の優先順位の明確化	(学内実習で) 母子の家庭訪問のイメージがある程度できていたっていうのもあって、落ち着いて、やることができたかなーと思って、お母さんとお話しするときも、焦って聞かなきゃいけないことを取りこぼしてしまうということもなく、リラックスして落ち着いて話を聞くことができたのがよかったなと思った。	A7
		学内実習でイメージができていたので、ある程度要点を絞って、必ず聞かなければいけないことを聞いたりとかという風に話すことができたかなと思う。	A4
		ここ(教室)で学生同士(計測演習を)やっている時は緊張感があんまり足りないっていうか、学内実習で家庭をイメージすること、教室で測定するときの緊張感が全然違った。前期(の学内実習)であれくらい緊張したので後期の時は意外と緊張感がなく、冷静に自分のすべきことを考えることができたので、(前期実習の)時のイメージをだいたい自分の中で落とし込めたというところが、後期ですごく出せた。(学内実習で)初めて家庭訪問に行くというところがあって、すごいどうしようとか、手順を頭の中で必死に一言一句正しくやろうとかそういうところもあったので、こういうことは絶対聞かなきゃいけないとか、すべてにおいて優先順位が高かったけど、実習に行ったり健診などを見させてもらって、大事な項目は何かというのもなく分かってきて、これだけはおさえておいて、後は話の流れで聞けたら聞こうという、そういう分け方も自分なりに分かってきたので、ちょっと気持ちに余裕を持って、緊張はするんですけど、前期ほどではなかった。	G5-2
		学内実習の時はすごい緊張して、やらなきゃ、しなきゃ、これ聞かなきゃという風だったけれど、後期の方がリラックスっていうか、ここは大事だからここじっくり聞きたいなーとか、すごい優先順位ができて、ゆっくりお母さんの話とかもきけたのでそこが良かったかなと思う。	I5
		成人の家庭訪問では仕事の都合で訪問時間が限られていた。短い時間の中でもしっかりと何を聞きたいか何をお話したいかっていう優先順位づけをすることができた。アセスメントの3つの柱の全部を聞かなきゃと思うのではなく、その中でもどれが一番大切だっていうのを意識して聞くことができた。また、アセスメントした中でも今聞く情報かということを取捨選択できた。これは、(学内実習の)母子の家庭訪問の事例があったから後期にも活かされたのかなと思う。	I6
		母子の家庭訪問も成人の家庭訪問も事前に健診や乳幼児健診のデータという情報があって、その中からこの方は何が課題なのか問題なのかっていうのを、事前に確認できたことで、家庭訪問に行ったときに、何は絶対に見落としてはいけないか確認した方がいいかということ、自分の中でしっかり確認できたことは良かったって思っている。それができなかったらきっと本来の目的を達成できずに、意味のない訪問になってしまったと思うので、事前に情報をいただいてその情報から本当に必要な絶対に確認したいところとか、優先順位が分かって行くっていうところが、母子・成人の家庭訪問に共通して大事なことで、母子の家庭訪問から成人家庭訪問の学びにつながったかなって思う。	F12
		成人の家庭訪問では、データを経年的に見るっていうのを学内で大事って言われていたので、実際に家庭訪問に行かせていただいた際も特定健診のデータを経年的に見て、値の変化やその値が意味していることとか説明しながら、それがどう生活と繋がっているのかっていうことを対象者さんに思い当たるところとか聞いたりしながらできたかなって思ったので、データを経年的に見るっていうところが学内で学んでいて良かったなーと思った。	A9

適切な情報収集方法を考え実践	<p>母親への質問の仕方ということでも、授乳回数等について相手が答えやすいような聞き方や、ただの質問にならないようなコミュニケーションの取り方も、自分が工夫しなければならない点だということがわかったので、そこが後期実習でも役に立ったと思う。</p>	I2	
	<p>(学内実習で) お母さんへの生活の聞き方とか先生方が見本でやってくださったので、後期実習の家庭訪問では、前期よりスムーズに、お母さんも答えづらくない質問の仕方を自分も考えてできたかなって (思う)</p>	I3	
	<p>一日の生活をどんなふうに聞いたら答えやすいかなということも、計画の段階でじっくり考えることができたので良かったなって、後期の実習に活かすことができたなって思う。</p>	F11	
	<p>(学内実習では) すべてを完璧にしなきゃっていう気持ちが強かったのかなと思う。だから優先順位を広くとってしまってもあれもこれも広く聞かなきゃいけないとか、こだわっていたところが、ある程度これを聞けばいいっていうのを先生たちから見て教えてもらったことで、そのくらいいいの、後はじゃあその話の展開からでいいの、っていうのを知ることができた。そこから、この情報を事前に知れるな、3歳児健診のお姉ちゃんの情報はある程度事前に知れるとか考えられた。学内実習で基本的なことを押さえてもらえたから、応用することができたという感じ。</p>	G9	
情報収集	対象者の話を聴く姿勢	<p>学内実習で、母子ではあったけれど、礼儀や対象の方にどこまでやってこなきゃいけないかっていうのがしっくり分かって、じゃあどこまでやろうというふうに考えて、結構事前の情報収集とかも幅広くできて準備したことで、少し自分に自信がついて行けたっていうことで、後期は結構リラックスじゃないけれど、ちょっとでも自分ができることがあったことで結構話とかもひろくできたりとか、絶対にいきなり行ってたらできなかつた話しやすい雰囲気とかも少しは作れたかなと思う。</p>	C5
		<p>学内実習では、同級生同士で情報交換したり、手技を見たりして、自分たちなりの工夫も最大限作り上げて挑んだ。しかし、良かれと思ってしている手技が悪い面に働きかけているっていうところも、同級生同士だと現場に出ないから善し悪しが判断できなかったところを、先生方から見ると、そういうのはさすがに生活の場ではちょっとっていうところとか、手技の一つ一つで工夫点とか、誤差に影響を与えていたとか、そういうことを視野を広くもって、気づかせてもらえたところがよくなったなって思っている。自分たちだけじゃ気づけないことを気づかせてもらった。だから現場に出たときにそこを意識して正確な値で測定することができただろうし、自分たちもちょっと落ち着いて、いろんな相手を知ろうとして相手から話を素直に聞くことができたのかなと思う。</p>	G7-2
		<p>看護学校でも家庭訪問 (同行訪問) を1回したけれど、その時は異常を見つけるっていう感じが、自分の中ではアセスメントで多かったなと思う。学内実習でアセスメントして、自分が聞きたいことだけじゃなくてお母さんの聞きたいこととかお母さんが今悩んでいることとか知りたいことをしっかりと聞くというのが本当に大切な姿勢なんだなというふうにして、それが後期の家庭訪問にもつながって、自分の中でできたのかなというふうにした。保健師が行う家庭訪問の意味っていうか、ただ評価するっていう面だけじゃなくて、まず関わる機会をもてる家庭訪問を大事にしていってというのが大切なんだなというのを学んだ。</p>	I7-2
		<p>後期実習でも緊張していたので手順書を作ったが、手順書にも絶対聞くことという優先順位を立てたので、質問をするだけの家庭訪問ではなく、お母さんに聞きたいこととお母さんの話をしっかりと聞いてからお母さんがどういう気持ちで子育てしているのかという、自分が評価するよりお母さんの気持ちや家族の話をちゃんと聞けたのかなと思う。そこが、前期にやっけてよかったなと思う。</p>	I4
情報提供	十分な準備をした情報提供	<p>(学内実習では、予防接種について) 実際にどういう通知がきて何をいつ受けるっていうのが分からずに実習していて、後期までに予防接種だったら時期とか通知方法とかどんな用紙かっていうのを自分で見ていって、それはインターネットに載っていたので事前に見ていくことができて、家庭訪問に行ったときには、母子手帳で事前に得ている年齢とかから、それをちゃんと済んでるのかみて、こういう通知きてますかっていうのを自分から聞くことができたなって思う。</p>	B5
		<p>(後期実習で) インフルエンザの予防接種のことを聞かれたけれど、(学内実習で) 母子手帳のどこのページを見るっていうのを確認していたので、一緒に予防接種のところを見てインフルエンザがいつからということとか、心配なことがあったら (役場の) 保健師さんに連絡してくださいと話したりして、お母さんが不安に思っていることを一緒にその場で確認することができて、それは、(学内実習で) 母子手帳を見て、ここにこれは書いてあるっていうのも知ってたから、(実際の家庭訪問で) 思い出してそれがつながったのかなと思った。</p>	A8

情報提供	十分な準備をした情報提供	(学内実習で) 社会資源のアセスメントはしていたけれど、具体的に把握をして実習に臨めていなかったの、それを質問されて答えられなかったことがあった。それがあって、予防接種のことやその地区の通知のされ方とか本当に細かい具体的なことを把握していなければならないということが分かって、実際に(家庭訪問を)行うことのイメージになった。	B2
		情報提供については、家庭訪問に行く結構早めの段階から、役場の母子担当の保健師さんに、実際お母さんに渡している書類を全部いただくことで、実際に書類を確認して、こういう情報をもらってるんだとか、こういうところは気になるかなあとか、予測を立てながら準備することができたかなと思うので、やっぱりそういう面でも後期に活かせることがあったと思う。	D11
	対象者が理解しやすい説明	子育て支援広場のことをお母さんと話させてもらった。前期の(学内)実習の時は、子育て支援広場というものがあって、いつどこでやってますという紙の資料をもらってそれを使った。後期実習で、実際それぞれがどういうことをやっているのかというところを一つずつ見せていただいて、どういう雰囲気だったり、スタッフさんがどういう人がやってるのかとか、人数は多いのか少ないのかということを見せていただいて、乳健でお会いした方で、県外から来てなかなか自分から声をかけるのは難しいからそういう広場に入っていないというのを聞きして、実際にそういうのは知ってますかとか、ここに子育て支援のスタッフさんがいて気軽に話ができますよとか、自分が見学して感じたことをお伝えして、そういう経験も含めて社会資源の提供ができたかなって思う。	A6
		学内実習でテレビは子どもは見てもいいのかっていう相談があって、そこで失敗してしまい、いいと思いますなんて言っちゃった。それで、それはまずいっていうこと知って、その理由とかを調べて、人対人のスキミングが良いということを学んだ。(後期実習で)対象のご家庭は結構テレビを見ているっていう情報があって、「テレビとか見られてますか」という話を聞いて、実際にはその情報とは違って、お母さんは何分かって決めてあんまり見ないようにしているっていったけど、そこは裏めてお母さんがそうやって意識してくださることで、テレビはこういう害があって、それをあんまり見せないようにしてるってことでこういういいことに繋がってると思います、という説明した。前期に失敗があったから、ちゃんと考えたかなと思った。	A10
学内実習から改善	具体的な注意点を意識	成人の家庭訪問では、授業でメタボの構造図で友達同士で、友達を知識をもっていない住民さんに見立てて、そういう人でも分かりやすいように専門用語を使わずに理解してもらうための説明の仕方を前期の演習(授業)で学べたので、それが家庭訪問の計画に役立ったのかなと思う。	E4
		(学内実習で) 汗をかいてしまったことがすごい印象に残っていて、もう汗は絶対かきたくないなんて思ったりして、タオルは絶対常備していこうとか、チェックリストは絶対ここにおいておくとか、つい走らないとか、(学内実習で印象に残ったことを)中心的にやっていた(意識して家庭訪問をした)	H11
	改善したチェックリストの活用	学内実習で技術の基礎的なところを実際にやることができた。実際にやった時に体重計を畳の縁においてしまってエラーが出たけれども何故エラーが出たかわからないと直し方とか迷ってしまった。その失敗から、平らなところでやらなきゃいけないということが分かった。学内実習で失敗した経験があったから、実際に実習で行かせていただいたときは、それが記憶に残っているから失敗しなかった。	A3
		(学内実習で教員からの指摘)があったので本番(実際の住民を対象とした家庭訪問の時)はすごい意識して注意できたので落ち着けたり、エプロンも忘れなかったし、自分が駄目だったところをちゃんとおさえられてすごい心構えができたので、(学内実習があって)すごい良かったかなと思っている。	H6
改善したチェックリストの活用	前期(学内実習)で一回失敗して学んでおくっていうのはすごく良かったんじゃないかなっていう風に思った。	F5	
	学内実習の時に、母親に聞く内容や赤ちゃんの測定値をメモする用紙を、すごく細かく作ってメモ帳に貼って持っていたけれど、限られた時間なのに項目を作りすぎてしまって、本当に必要なところが聞き取れなかったりしたところが反省点だった。終わった後の先生からの評価で、駄目じゃないけど別の方が効率がいいよっていうアドバイスももらい、それを自分で反省して後期の実習で活かすことができて、(後期実習では)すごく効率よくできた。	F3	
		後期の実習で成人と母子に共通して前期の(学内実習)が役に立ったのは、自分の持つて行く記録用紙が、学内実習の時に作ったもので使いにくかったり、落としてしまったことがあったので、絶対見なきゃならないところは赤くしたりとかマークをつけるとか工夫をしたり、自分のイメージする話の流れで自分の用紙を作っていくことができ、実際に行う部分の自分の資料の工夫が行えたかなというところがあった。	B6

学内実習から改善	改善したチェックリストの活用	学内実習の時は、チェックリストをすごく細かく、大きく書けるように広めに枠組みをしたらA4で3枚くらいになり、ページをペラペラめくりながらやった。その後の講義や先生のデモンストレーションを見て、できるだけ簡素にと思った。また、実習先の実際のチェックリストというか、評価項目なども見ながら優先順位を立てて、できるだけ簡素に省略しながら聞いたものをすぐに記入できて、あとからもわかるようにしようということをすごく意識しながらチェックリストも作るのができた。前期(学内実習)でのやりづらかったな、失敗したなっていうところが、後期の評価の視点とがしやすくなるのができた。	G4
		(学内実習で必要な内容を効率よく聞くためのメモ用紙の作り方のアドバイスをもらい後期実習で実践して効率よく聞き取ることができたことで)事前に困ったことはないですかと聞いていたが、その必要なところを時間を割けた。	F4
	マナーを守った家庭訪問	(学内実習では座敷の部屋でやったので)座敷の座り方などの指摘を受けていた。後期実習で訪問したおうちが、長テーブルで畳でお座布団が用意されてて対面で、境目(畳の縁)があってというお部屋で、(前期実習で)練習した通りのおうちのところに来たーと思って。(前期実習で)全然意識していなかった座り方から先生に教えていただいたので。逆にお母さんから礼儀正しいですねって言われたりして、あ、良かったーって思いながら(ハラハラして)	H10
	時間管理	学内実習で時間配分が分かったので、前期の反省を振り返りながら優先順位を前期よりつけながらできたのかなと思ったので良かったのかな。	D10
	訪問予約時に必要事項を伝える	(学内実習で後期に役立つのはアポイントの取り方) 学内実習では、アポイントをとるときに自分の自己紹介と時間くらいを伝えて行くつもりだったけれど、実際に行くことになれば車で行くことになるだろうし、バスタオルとかもその家庭のバスタオルを使用する予定だったので、事前に伝えておくことで計測もスムーズにいくなって思った。スムーズに行うための事前準備で伝えておくべきこととかを(前期実習で)改めて認識することができたので、これはちゃんと伝えようっていうことが意識づいたから後期も何も考えずにアポイントをとることができたのかなと思う。	G6
	適度な緊張感	(学内実習で)大丈夫かなっていう評価してもらって安心すると言うか、前期(学内実習)の方が緊張していたけれど、後期は少しリラックスしてお母さんの話を聞くことができた。赤ちゃんの状態を見ながら測定できたんじゃないかなと思う。	F10
		ここ(教室)で学生同士(計測演習)をやっている時は緊張感があんまり足りないっていうか、学内実習で家庭をイメージすること、教室で測定するときの緊張感が全然違った。前期(の学内実習)であれくらい緊張したので後期の時は意外と緊張感がなく、冷静に自分のすべきことを考えることができたので、(前期実習の)時のイメージをだいたい自分の中で落とし込めたというところが、後期ですごく出せた。(学内実習で)初めて家庭訪問に行くというところがあって、すごいどうしようとか、手順を頭の中で必死に一言一句正しくやろうとかさういいうところもあったので、こういうことは絶対聞かなきゃいけないとか、すべてにおいて優先順位が高かったけど、実習に行ったり健診などを見させてもらって、大事な項目は何かというのまんとなく分かかってきて、これだけはおさえておいて、後は話の流れで聞いたら聞こうという、そういう分け方も自分なりに分かかってきたので、ちょっと気持ちに余裕を持って、緊張はするんですけど、前期ほどではなかった。	G5-1
		学内実習は、自分主体でやらなきゃ、上手くやらなきゃ、正確に測らなきゃ、失敗しないように終わらせようっていうことが強く働いていたけれど、後期実習では、住民さんのことをちゃんと知ろうというふうに思えた。それは、前期(学内実習)でちゃんと押さえることができたものがあったからこそ、相手のことを深く知りたいと思える気持ちに、ちょっと余裕ももてたのかなっていう風に思う。だから、後期だともっと知りたいと思った情報をどこから取ればいいのか、という次のステップに行けたのかなって思っていて、お姉ちゃんとかと出会えないなら、どこで情報を取ればいいのかとか、お母さんの健康データが役場にあるのではないかとということに、いろんなことに気持ちを向けられる視野を広く相手を知ろうとできた。それは、前期(学内実習)である程度のこと自分が中でできたと思える経験があったからこそなのかな、と思った。	G8
		母子家庭訪問をやっておいて、成人家庭訪問は全然緊張しないで、むしろ早くどんな人なんだろう会いたいななんて思いながら、早くこれを伝えてあげないと危ない、この人は、と思いながら、何とか早くと思いながら、結構楽しみにして行ったので、楽しかった記憶しかなくて	H13

*生データは、逐語録から取り出した語りの文章を常体に統一し、主語や説明が足りないところは括弧内に補足した。

3. 単独家庭訪問からの学びや課題（表3）

単独家庭訪問実施後、学生が感じた学びや課題に関する語りを分析したところ、3カテゴリ、9サブカテゴリが抽出された。抽出されたカテゴリは、【支援方法の理解】【家庭訪問の重要性を理解】【自己課題の気づき】【単独訪問に対する思い】であった。

1) 【支援方法の理解】

〈対象者の生活に着目した支援〉〈対象者がもつ力をのばす支援〉〈訪問目的や根拠法令を意識〉で構成された。

家庭訪問で対象者と話をする中で、「事前情報からは分からない生活状況がある」ことに気づき、「対象者がより良い生活をしていけるように助言していく」ためには、対象者の生活を理解し支援の方針を決定する〈対象者の生活に着目した支援〉を行っていく必要があると感じていた。また、家庭訪問時に学生が説明したことを「わかってくれて頑張りますと意欲を見せてくれて、その人自身が持っている力がある」ことを感じ、〈対象者がもつ力をのばす支援〉の大切さを理解していた。多くの健康課題を持ち、多くの法律が関係している高齢者への訪問で「この法律の目的で行くということをちゃんと持つべきなんだな」と強く感じ、〈訪問目的や根拠法令を意識〉していた。

2) 【家庭訪問の重要性を理解】

〈直接話すことで対象理解が深まる〉〈家庭訪問の大切さ〉で構成された。

学生は、指導者から提供された情報や電話予約の時に聞き取った情報などから対象者のアセスメントを行い、「この人はこういう人だっというのを自分で考えて」訪問計画を立

案する。しかし、家庭訪問で対象者に会い話をする中で「住民さんに実際に合って自分がお話しして色々知っていくことで、その方がちょっと分かるようになってくるんだな」と、家庭訪問で住民と〈直接話すことで対象理解が深まる〉ことを実感していた。「実習先の保健師さんが電話相談が来たらずぐに訪問に行く」ようにしていることを知ったり、単独家庭訪問で「対象者さんと直接顔を見て話せるとか、時間をしっかりかけられる、貴重な機会だ」と感じたことから、〈家庭訪問の大切さ〉を理解していた。

3) 【今後の課題の気づき】

〈正確な計測が課題〉〈話の聞き方が課題〉〈幅広い知識を持つ必要性〉〈対象者を敬いながら指導〉で構成された。

学内実習で計測方法や情報収集の方法を学んで単独実習に臨んだが、単独家庭訪問でもうまくできなかった場面を経験していた。計測ミスに気づいて再計測をしたことから〈正確な計測が課題〉だと感じたり、対象者から話を聞くときに「事情聴取とか一方的になってしまった」ことから〈話の聞き方が課題〉と感じていた。また、住民と会い話をしたことで、「自分たち以上にお母さんたちは情報を沢山調べて使っている」ことを知ったり、乳児を養育する母親に「兄弟のことだったりとか、保育園や学校のことなどについて悩みを抱えている方」もいることを知ったりしたことで、支援するためには自分が〈幅広い知識をもつ必要性〉があると感じていた。高齢者への家庭訪問を経験したことで、「今までの生き方を考えて」〈対象者を敬いながら指導〉する必要があると感じていた。

表3 単独家庭訪問からの学びや課題

カテゴリ	サブカテゴリ	生データ	対象学生	
支援方法の理解	対象者の生活に着目した支援	(どのライフステージの家庭訪問対象者でも) 体重増加や生活リズムなどの理想はあると思うが、その人(対象者)の生活に合わせた、継続できるようなことを保健師として伝えて行けるといいということ学んだ。その人(対象者)の生活をみて、継続できるように一緒に考えていく姿勢がすごく大事だなと思った。	E5	
		(後期の) 乳児家庭訪問の対象者が医療専門職の方だった。対象者は、その人の生活の特徴を踏まえた上で子育てをしているので、対象者の個性を考えた事前準備と自分の勉強が重要になるのかなということ、実習をとおして学んだ。	B9	
		(後期の乳児家庭訪問前に色々想像していたが、実際に訪問してみると違ったこともあった) 家庭訪問の対象者のことを事前情報だけで想像するだけでなく、実際に目で見て、対象者がより良い生活をしていけるように助言していくことがすごく大事だと感じた。	E7	
		実際に家庭訪問をして話を聞くと、事前情報からは分からない生活状況があり、本当に生活することで精一杯ということが分かった。メタボ予防も大事だが、生活が成り立たないとメタボ予防には行かないことも分かった。実際に住民と話すことで、メタボ予防なのか生活を支えることなのか、(支援の)優先順位が変わるのかなと感じた。	B8	
	対象者がもつ力をのばす支援	(後期実習の) 母子家庭訪問の母親は産後抑うつ症状があったり、成人家庭訪問の対象者は間食などの課題があったりしたが、母親は自分で子育て支援広場や実家に行くという対処を自分でしていたし、成人の方は学生がちょっと説明しただけで分かってくれて頑張りますと意欲を見せてくれて、その人自身が持っている力があると思った。自分(学生)が持っている知識などをどの程度伝えていけばいいのか、ということも課題としてあるなと思った。	E6	
		後期実習の家庭訪問計画立案時に「確認する」という項目が多く、教員から「保健師は評価者にならない」ということを言われて、それがとても響いた。母親が兄にどのように関わるのが何故いいのかという根拠を、母親がしっかり理解して関われるように支援していくことが重要な保健師の役割だということも教えてもらい、少しはそうように考えられるようになったのかなと思う。	D12	
		(後期実習の家庭訪問計画立案時に、教員から) 兄がこれからどうなっていくのかという見通しを母親が持てるかわかりがとて大事ということも教えてもらい、その視点が(自分には)あまりなかったなと思った。	D13	
	訪問目的や根拠法令を意識	法的根拠を持っていくっていうのが、あそつかと思って母子は母子で全然違うっていう、これに行くにはこの法律だからっていうのは私はこの目的で母子に行くんだっていうのと、成人はほとんど高齢者の80代半ばの方だったんでほとんど高齢者の方で、いろんな法律が重なってきて私はこの保健指導はこの法律の目的で行くんだっていうのはちゃんと持つべきなんだっていうのは、指導してきっていくかお話ししていく上で、私は何でこの人のために家庭訪問してあげるんだらうっていうのをすごく感じて、何のためにこの人の何の目的のためにっていうのをそのすごく感じたっていうのが、成人の訪問かなっていうのかな、結構健康問題が多かったんでそこをすごく感じた。	H14	
	家庭訪問の重要性を理解	対象者と直接話すことで対象理解が深まる	(対象者に) 電話をして情報を聞いて対象者のことをイメージして、この人はこういう人だっていうの自分で考えて、いろんな計画を考えた。でも実際行ってみたら、性格も自分がイメージしていたのと違うし、この人実はこういう人だったんだなっていう(ことを思った)。電話でもったイメージのまましゃべっちゃって、こうですよ、こういうの食べてませんかという言い方をして、「私はそんなじゃないわよ」みたいな言い方をされたりしたので、家庭訪問に行くのはまたちょっとちがうのかなっていう風に改めて感じた。その人のありのままの姿っていうか、そのありのままの生活、お家の環境を見るのはやっぱり、そういうイメージとか取っ払って、受け入れる態勢で行くのが大切になっていう風に(思った)。きっとこれは家庭訪問だけに言えることじゃないけれど、これから母子でも高齢者でも成人の方でも家庭訪問に行く上では私はそういう風に心がけていきたいなっていう風に学べたのは良かったと思う。	H16
			家庭訪問前に情報をいただいて自分でアセスメントするうちに、事前情報だけじゃわからない情報がいっぱいあって、この人をもっと知りたいなとか、疑問がどんどんどんどん生まれてきて、実際にあったことがないからどんな人なんだらうって想像しながら(アセスメントして)、家庭訪問に何って、あーこういう方だったんだとか、色々お話ししていくうちに生活状況の何でこの生活になった背景というか、裏の裏まで本人から聞き出すことができ、そういう事情があつてこういう生活しているんだとか、目では見えない紙の情報だけでは分からない情報って、本人に聞いてみたら、会ってみたいしなと分からないんだなっていうふうにも、授業の中でも、住民さん主体とかっていうのも学んできたけれど、やっぱり住民さんに実際に会って自分がお話しして色々知っていくことでその方のことがちょっと分かるようになってくるんだなっていうことは、家庭訪問だけじゃないけれど、すごく重要だなっていうことが学ぶことができたのかなって思う。	F13

家庭訪問の重要性を理解	家庭訪問の大切さ	看護学校でも家庭訪問（同行訪問）を1回したけれど、その時は異常を見つけるっていう感じが、自分の中ではアセスメントで多かったと思う。学内実習でアセスメントして、自分が聞きたいことだけじゃなくってお母さんの聞きたいこととかお母さんが今悩んでいることとか知りたいことをしっかりと聞かっていうのが本当に大切な姿勢なんだなというふうに思ってた。それが後期の家庭訪問にもつながって、自分の中でできたのかなというふうに思った。保健師が行う家庭訪問の意味っていうか、ただ評価するっていう面だけじゃなく、まず関わる機会をもてる家庭訪問を大事にしていってというのが大切なんだなというのを学んだ。	I7-1
		家庭訪問に行ってみて感じたのが、やっぱり貴重な機会だなっていうこと。対象者さんと直接顔を見て話せるとか、その方に対して時間をしっかりかけられるっていう、貴重な機会だなって思って。顔を見るっていうのが、母子だけじゃなく、成人も高齢者も大事だなって思うので、やっぱり貴重な機会だし有効なことだなってという学びがあった。	A11
		実習先の保健師さんが電話相談が来たらすぐ訪問に行くっていう風にしてたのを見たのもあるけれど、顔を見るのは大事だなって思い、家庭訪問は貴重な機会だし有効なことだなってという学びがあった。	A12
今後の課題の気づき	正確な計測が課題	（後期実習で）身長を計測した時に76cmくらいずれちゃった(?)りもして、(そのことに、赤ちゃんの)洋服を着せ終わった後に記録をしておかしいと気づいて、これはそのまま見過ごしてはいけないと思って、「すみませんが、もう一度(測らせてください)」とお母さんに言ってもう一度洋服を脱がしてもらって、2回目の測定をした、という失敗を本番（後期実習）でしてしまった。お母さんたちはちゃんとした数値を出してくれたから良かったよーなんて言ってくれたけれど、まだ自分はちゃんとできないんだなって改めて感じたので、これからは計測する機会絶対あると思うので、そこを今回の一年間の実習で忘れないで思い出していこうかなって思っている。	H12
	話の聞き方が課題	学内実習の時の課題でもあるけれど、聞き方が難しいなって思っていて、情報を得るために聞かなきゃいけないことはチェックリストであげていったけれど、事情聴取とか一方的になっちゃってたなっていうのは感じて、経験も必要だとは思いますが、聞き方だったりも技術になるのかなと思うけれど、そういうところの勉強は必要だなって思った。	A15
	幅広い知識を持つ必要性	実習に行ってみて必要だなと感じたのは、市販の子育てグッズに関する情報。市販の子育てグッズ、椅子だったりとか、歯ブラシの月齢によっていろんな種類のブラシがついているついてないとか、色々なものが売っていて、それを使っているお母さんもいて、自分たち以上にお母さんたちは情報を沢山調べて使ってるんだなというのを学んだので、そういうのをもし聞かれた時もそういうのを聞きたくなるのかなって、お母さんからしたら思うので、そういう一般的な資料だったり物品とかも調べておくといいなっていう風思った。	A13
		お母さんの悩みには、月齢特有のもの以外に、きょうだいのことだったりとか、結構先のこと、保育園や学校のことなどについて悩みを抱えている方もいらっちゃって、月齢特有のこと以外にも幅広く知識を持ってなきゃいけないなって思った。	A14
	対象者を敬いながら指導	成人家庭訪問の対象者は高齢者の年齢の方だったので、対象の方を敬って、今までの生き方を考えて指導しなきゃいけないというか、伝えなきゃいけないっていうのもすごく感じた。	H15

*生データは、逐語録から取り出した語りの文章を常体に統一し、主語や説明が足りないところは括弧内に補足した。

考 察

1. 学内実習が単家庭訪問に役立ったこと

1) 生活の場での計測・観察技術

学内実習は、学内の和室で生活の場に近い環境で2か月児家庭訪問を行った。乳児の家庭訪問において、体重測定や、運動発達確認にかかわる一連の看護行為は、育児者との信頼関係の形成に役立つことも多い。実際に児に触れて、育児者との愛着を共有しつつ安全な技術で確実に発育発達を確認する。この

時の姿勢により、保健師に対する信頼が高まり、この人にならば育児の相談をしてみようという気持ちを引き出す¹⁵⁾。そのため、〈正確な計測技術の習得〉〈家庭環境に合った計測方法を習得〉といった【計測技術の習得】や〈発達確認方法の習得〉等の【計測以外の技術の習得】という、2か月児の訪問に必要な身体計測や発達等の確認に必要な技術の習得を強く意識したと考えられる。これらの内容は、看護学校ですでに学んでおり、学内演

習はその振り返りから行った。看護学校と本専攻科での家庭訪問の実践で大きく異なるのは、計測や観察を行う場所であろう。看護学校では、病院内で計測や観察を行うことが前提であるが、家庭訪問では対象者の自宅すなわち対象者が生活している場にベビースケールなどを持ち込んで行う。初めて訪問する場合は、訪問時に部屋の様子を観察し、適切な方法で計測や観察を行わなければならない。そのため学内実習では、和室でベビースケールを用いて計測する際の注意点や、複数の計測や観察をスムーズに行うための物品の配置など〈対象者に配慮した計測方法の理解〉ができたと考えられる。さらに、この学内実習での学びがあったため、単独訪問でも訪問先の環境に合わせて【乳幼児の計測】ができたと考えられる。学内実習では和室での正確な計測方法を学んだが、実際の訪問では、和室の他、カーペットの部屋やフローリングの部屋など様々な状況で計測や観察を実施してきた。和室での計測や観察の原則や注意点を学内実習で押さえたうえで単独家庭訪問を実施していたため、訪問時に対象者の自宅の様子を観察し、計測や観察に適した方法をその場で判断し、実施できたのだと考える。今後も和室を例にして、計測や観察の基本を押さえるとともに、生活の場でそれを応用して確実に実施できるように指導することが必要であると考え、

2) 情報収集方法の理解

家庭訪問においては、家庭訪問対象の援助ニーズを明確にし、対象本人・家族の生活に見合った方法で援助提供するために、成人や高齢者の場合でも、乳幼児の場合でも、対象本人ばかりでなく、家族全員の健康生活の援助のために必要な情報を収集する¹⁶⁾。家庭訪問前に得られる情報には限界がある場合が多い中で家庭訪問の計画を立案するが、その計画の中で、家庭訪問でどのような情報を得ることが必要かを明確にしておくことも必要で

ある¹⁷⁾。しかし、家庭訪問実習を経験した学生は、臨地実習のように毎日対象者とコミュニケーションを図ることや顔を合わせることはないため、訪問の限られた時間や回数の中で対象を把握することの困難さを感じている¹⁸⁾。今回の学内実習においても、実習施設から得られる内容と同様の情報を学生に提示し、その中で家庭訪問計画を立案した。家庭訪問計画指導時に、必要な情報収集を行うための方法の1つとして、情報収集項目を整理し、記録できるようチェックリストの作成を促したため、学内実習時にはそのチェックリストを活用しながら情報収集しようと取り組んでいた。しかし、知りたいと考える情報量が多く限られた時間内に聞き取ることができなかつたり、作成したチェックリストが使いにくかつたりするなど、学内実習ではうまくいかないと感じる場面が多かつた。その経験を活かし、単独家庭訪問では対象者が答えやすい質問を考えたり、市町村役場の記録から情報収集するなど〈適切な情報収集方法を考え実践〉できたり、学内実習から〈改善したチェックリストの活用〉をしていた。家庭訪問での情報収集においては、一方的な情報の聴取にならないようにする¹⁹⁾必要がある。学内実習での経験から、単独家庭訪問では、対象者がもつ悩みや知りたいこと等〈対象者の話を聴く姿勢〉で、訪問計画立案時から〈情報収集項目の優先順位の明確化〉を行い〈適切な情報収集方法を考え実践〉できたことで【情報収集】ができたと感じていた。情報収集方法については、学生自身が考えた方法や記録用紙を用いて学内で実践し、改善点に気づき、単独訪問時に改良したものを活用するという段階を踏んだ方法が有効だったと考えられる。

3) 情報提供のための準備

学内実習では、多くの学生が実習市町村の社会資源について情報収集をし、説明できるよう準備していたが〈情報提供のための準備

不足)を感じていた。したがって単独訪問前には市町村役場からの書類を見せてもらったり支援施設の見学をしたりして〈十分な準備をした情報提供〉により具体的な情報提供ができていたことがわかった。社会資源の情報提供をするためには、様々な社会資源を把握しておく必要があり、地域の社会資源については、その地域が持っている社会資源、さらにどうしたら活用できるのか把握しておくことが重要である²⁰⁾。学生は、家庭訪問実習において、乳児の発達理解不足による困難さや社会資源の活用による効果的な援助の困難さも含めた、知識・経験・情報不足等による困難さを感じている²¹⁾。本学学生も学内実習で社会資源に関する理解の不足を感じたため、単独訪問前に社会資源の一つである支援施設の見学をしたり、市町村役場からの通知等を見たりして、具体的な情報提供ができるよう準備し、対象者に分かりやすく情報提供ができていたと考える。

2. 単独家庭訪問で学びを深めることにつながったこと

1) 家庭訪問の特徴の理解

学内実習前には、家庭訪問の特徴を理解できるよう、教科書や視聴覚教材等も用いて授業や演習を展開している。しかし、学内実習を経験することで「DVDや教科書を見ただけでは気づけなかった訪問の流れや訪問時の対応を理解できた」といった保健師が行う〈家庭訪問の具体的なイメージの獲得〉ができたことや、「家庭訪問の対象は家族を単位とするため、家族の血圧や環境も見ることが必要だと学んだ」といった保健師が行う〈家庭訪問の特徴の理解〉ができたことで【家庭訪問の理解】につながっていた。前田ら²²⁾は、一住民としても保健師と関わる機会の少ない年代である学生にとって、実習前に保健師による保健活動の実際を想像するのは困難であると指摘し、実習前に家庭訪問場面のロール

プレイングを行うことにより家庭訪問場面のイメージ化が図れ、家庭訪問実習を行った全員が安心感を得て、自信をもって実習に臨むことができたと報告している。本学の学生も、学内実習で自らが家庭訪問を実施することで保健師による【家庭訪問の理解】ができたことと実感できたのではないかと考える。

保健師が行う家庭訪問の特性には、「困っている人、助けを求めている人への訪問」「つながり、顔売り訪問」「深く学ぶ訪問」がある²³⁾。単独家庭訪問では、対象者から情報収集することとおして対象者の生活や対象者がもつ力を理解し、〈対象者の生活に着目した支援〉や〈対象者がもつ力をのばす支援〉が大切なことを学んでいた。学生は、家庭訪問で住民と話をすることによって、対象者の実態を「深く学ぶ訪問」ができ、適切な支援方法を考える視点を学ぶことで、家庭訪問における【支援方法の理解】ができたのではないかと考える。また、家庭訪問の〈対象者と直接話すことで対象理解が深まる〉ことを経験し、「対象者と直接顔を見て関わる貴重な機会」だと感じたり「市町村保健師が電話相談が来たらすぐに訪問に行っていたのを見て貴重な機会だし有効なことだ」と感じたりしたことから〈家庭訪問の大切さ〉を理解したことで【家庭訪問の重要性を理解】することにつながったと考えられる。

学生は家庭訪問時に初めて対象者と会うことが多い。家庭訪問で対象者に受け入れてもらうために、訪問準備として対象者へ連絡することや訪問当日に訪問者の自己紹介と訪問目的をわかりやすく説明することも重要である²⁴⁾。学内実習では、家庭訪問実施前の電話による事前連絡から開始し、訪問した際の自己紹介や訪問目的の説明も経験した。また、訪問中の立ち居振る舞いについても指導を行った。「訪問時のマナーは対象者から注意されないことなので、教員から指導してもらって良かった」と学内実習の学びの一つにあ

がっていた。情報収集を行う上で、対象者との関係構築は欠かせない。関係構築の最初の段階である訪問の事前連絡や訪問時の最初の自己紹介をきちんとできるよう、学内実習で経験しておくことが役立つと考える。

2) 自己課題の改善

学内実習で〈情報提供のための準備不足〉〈時間管理の不足〉を感じ、〈上手くできなかった経験〉をし、〈クラスメイト同士で失敗と改善点の共有〉をすることで【自己課題の気づき】を得ていた。より良い家庭訪問が実施できるよう〈具体的な注意点を意識〉したり〈改善したチェックリストの活用〉をしたりすることで、単独家庭訪問では【学内実習から改善】して実施することができていた。その一方で、改善できるよう意識していたが〈正確な計測が課題〉〈話の聞き方が課題〉と感じたり、対象者が持つ知識や悩みの実態に触れて〈幅広い知識をもつ必要性〉に気づくなど【今後の課題の気づき】があった学生もいた。技術論演習と実習からの個人・家族を対象とした地域の健康実践力向上効果を検証した調査では、技術論演習において、学生が実習場面で実際に体験するような模擬事例を選定し、保健指導の計画から家庭訪問場面の環境に見立てた空間を整えた上で、技術試験をおこなうなどの工夫をしたことにより、家庭訪問のイメージ化だけでなく、主体的な実践の基礎を固めることができた教育効果であり、学生の到達レベルの向上に寄与した²⁵⁾との報告がある。また、学生が困難に感じていることが表出できるような場を設定することで、困難感をそのままにせず、次の訪問ではどのように改善していくのかということを生徒自身で考える機会を設け、生徒の能力に応じた方法を生徒と教員がともに考えていくことが必要である²⁶⁾。今回の学内実習では、生徒が自主的に〈クラスメイト同士で失敗と改善点の共有〉をし、実習において生徒全員と教員が実習の振り返りを行い、改善方法等

について共有した。これらの経験から、単独家庭訪問に向けた具体的な改善点等に生徒自身が気づき、改善した方法で単独家庭訪問を展開できたのではないかと考える。また、このように課題に気づき改善方法を考えるという経験をしたことで、単独家庭訪問実施後に【今後の課題の気づき】を得ることにもつながったのではないだろうか。このような経験を繰り返すことで、保健師としての対象者との関わりや支援方法をより深く理解し、実践力を養うことができているのではないかと考える。

大池ら²⁷⁾の調査では、母子初回訪問実施前の生徒の殆どが不安を持っていたのは「母親との関係」、母親との関係性に影響を受ける「情報の収集」や「訪問の展開」、さらにモデル人形では経験できない健康で活発な動きをする乳児の「計測・観察技術」や「乳児の扱いや対応」、健康な乳児や家族に対する「訪問計画の立案」である。これらの不安は、母親の受け入れや協力、生徒の事前学習、教員の同伴や訪問前後のカンファレンスでの支援により、かなり不安が軽減できるとしている。本学では、学内演習で技術等の確認をし、訪問計画の個別指導を教員と指導者から受けた上で、公衆衛生看護学実習Ⅰから生徒単独訪問を経験し、公衆衛生看護学実習全体で単独訪問を4回経験することを特徴としてきた。生徒もそれを理解し、単独訪問を経験することを期待して入学しているが、それでも学内実習時には〈単独家庭訪問を行うこと〉の不安があった。しかし、学内実習で教員から生徒が実施した家庭訪問について指導を受けることで〈学内実習だから得られた学び〉があった、〈学内実習があつて良かった〉と【家庭訪問実習に対する思い】が変化していた。また、単独家庭訪問家庭訪問では〈適度な緊張感〉をもって「楽しみにして」行き、「自分のすべきことを考え」「相手のことをもっと知りたいと思える気持ち」で実施できてい

た。今回の学内実習では、過去の学生が実習市町村から紹介された事例を一部修正した事例を用い、一軒家の特別教室で乳児のいる家庭を再現し、乳児家庭訪問の経験がある教員が母親からのよくある相談を学生に質問することで、住民を対象とした家庭訪問に近い実習にした。その後、学生全員と振り返りを行ったことで、単独家庭訪問に対する不安の軽減にもつながったのではないかと考える。

3. 今後の実習に向けた演習内容

学内で生活環境に近い場所を設定して家庭訪問実習を行ったことで、家庭訪問を行った際に生活環境に合わせた技術を習得することができ、住民を対象とした家庭訪問を行った際には、学内実習と異なる環境でも正確な計測ができる方法を学生がその場で考え実施することができていた。また、実際の家庭訪問と同じように実施したことから教員から指導を受けることで、自己課題やその解決方法を考えることができたり、〈単独家庭訪問への不安〉を軽減し〈過度な緊張感〉で単独家庭訪問を実施することができていた。今後も、生活環境に近い場所で演習を実施することが単独家庭訪問に役立つと考える。

例年は、ロールプレイの前後にグループワークを行っているが、ロールプレイを行うのは代表学生のみであった。今回、全員が母親役の教員に対して家庭訪問を行ったことで、一人ひとりが自己課題を明確にし、家庭訪問の学びを得ることができていた。今後も、学内で実際の家庭訪問と同様のロールプレイを行うことは有効であると考えられる。しかし、今回の学内家庭訪問実習は、家庭訪問約60分、終了後の教員からのコメント約30分という時間をかけて行った。今後の学内演習で、同様に時間をかけて実施するのは、日程の面から難しい。そこで、少人数のグループで家庭訪問のロールプレイを行うこととし、その際には、グループ全員が家庭訪問を行う当事

者として考えながら参加できるような工夫や働きかけをしていくと良いのではないかと考える。

演習終了後、学生が得られた学びや課題をクラス全体で共有することで、自分では気づかなかつたことを知ることができたり、課題の解決方法を考えていくことができていた。今後も、学生間で学びや課題を共有し、課題解決方法を共に考えていくことができるよう、演習の中に共有したり解決方法を考えたりする時間を確保していくことが必要であると考え。また、今回と同様に、過去の実習生が経験した家庭訪問事例を一部修正した事例で、各グループ異なる事例に取り組むことで、学生全員の学びが深まることが期待できる。単独家庭訪問実習終了後にも、学生間で課題や学びの共有をする時間を設けることで、更に実習での学びを深めることができると考える。

結 論

1. 学内実習を行うことで、生活の場での計測や観察技術を習得し、単独家庭訪問先の環境に合わせて正確な計測を行うことができた。また、情報収集における課題が分かり、情報収集項目を整理したり話の聞き方の工夫を考えることで、家庭訪問での確かな情報収集を行うことができた。情報提供のための事前準備が必要であることに気づき、単独家庭訪問前に必要な準備を考え実践することができた。
2. 学内実習の経験により、授業で学んだ家庭訪問の特徴を更に理解することができた。その上で、単独家庭訪問を実施したり現場の保健師の家庭訪問の様子を見学することで、家庭訪問における支援方法や家庭訪問の重要性を理解することができた。また、学内実習での自分やクラスメイトの経験から自己課題に気づき、その改善方法などを考え単独家庭訪問で改善することがで

き、更に今後の自己課題に気づくことができ
きた。

謝 辞

FGIにご協力くださいました学生の皆様に
深く感謝いたします。

文 献

- 1) 標美奈子：家庭訪問による支援の展開。標準保健師講座2公衆衛生看護技術（中村裕美子著者代表），医学書院，東京，2020，pp. 134-142.
- 2) 田村須賀子：公衆衛生看護活動の展開方法論。最新公衆衛生看護学第3版2021年版総論（宮崎美砂子ほか編），日本看護協会出版会，東京，2021，p. 189.
- 3) 大西章恵ほか：現場の声から探る家庭訪問の現状。保健師ジャーナル，**64** (8)，684-689，2008.
- 4) 同上.
- 5) 稲毛映子：大学教育における家庭訪問実習で大切にしたいこと。保健師ジャーナル，**70** (10)，857-860，2014.
- 6) 相原綾子ほか：公衆衛生看護学実習の実習経験内容と目標到達度の分析。獨協医科大学看護学部紀要，**12**，29-38，2018.
- 7) 川南公代ほか：保健師選択制導入後の家庭訪問体験における学びと卒業時の到達目標との関連の検討。武蔵野大学看護学研究所紀要，**13**，21-30，2019.
- 8) 藤田彩見ほか：A大学看護学生が家庭訪問実習で感じる困難と今後の実習指導のあり方。新見公立大学紀要，**36**，119-123，2015.
- 9) 平澤則子ほか：公衆衛生看護学実習における学生の継続訪問実習の学び。日本地域看護学会誌，**20** (2)，73-79，2017.
- 10) 安藤智子ほか：看護師養成のための学士教育課程における地域看護学実習プログラムの評価。千葉科学大学紀要，**11**，127-141，2018.
- 11) 金井優子ほか：地域看護学実習における個別支援（家庭訪問）の評価と今後の課題。名桜大学紀要，**21**，149-155，2016.
- 12) 前掲，公衆衛生看護学実習における学生の継続訪問実習の学び。73-79.
- 13) 前掲，保健師選択制導入後の家庭訪問体験における学びと卒業時の到達目標との関連の検討。21-30.
- 14) 前掲，地域看護学実習における個別支援（家庭訪問）の評価と今後の課題。149-155.
- 15) 前掲，公衆衛生看護活動の展開方法論。最新公衆衛生看護学第3版2021年版総論。p. 210.
- 16) 同上，p. 208.
- 17) 坂本真理子：保健師の基礎技術。新版保健師業務要覧第4版2020年版（井伊久美子ほか編），日本看護協会出版会，東京，2019，p. 196.
- 18) 前掲，A大学看護学生が家庭訪問実習で感じる困難と今後の実習指導のあり方。119-123.
- 19) 前掲，新版 保健師業務要覧第4版2020年版，p. 196.
- 20) 中島富志子ほか：保健師学生の家庭訪問体験における対象理解に関する研究～社会資源の活用に関わる分析～，東都医療大学紀要，**8** (1)，31-39，2018.
- 21) 前掲，A大学看護学生が家庭訪問実習で感じる困難と今後の実習指導のあり方。
- 22) 前田則子ほか：保健所・市町村実習における実習前演習による実習イメージ化と自信獲得。鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要，**15**，43-48，2011.
- 23) 手島幸子：保健師が行う家庭訪問 家庭訪問の使命・意味・特性を考える。保健師が行う家庭訪問（新潟県保健師活動研究会），やどかり出版，埼玉，2018，pp. 4-6.

- 24) 前掲, 新版 保健師業務要覧第4版2020年版, p. 196.
- 25) 岩杉早苗ほか：公衆衛生看護技術論演習及び実習のカリキュラム改正における保健師学生の実践力向上効果—ミニマム・リクワイアメンツを活用して—, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, **24**, 17-31, 2016.
- 26) 前掲, A大学看護学生が家庭訪問実習で感じる困難と今後の実習指導のあり方.
- 27) 大池明枝ほか：保健師学生の初回訪問後の不安の軽減の実態—母子継続訪問実習において—, 地域看護, **34**, 150-152, 2003.